



日本国際飢餓対策機構 (Japan International Food for the Hungry: 略して JIFH) は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合 (Food for the Hungry International Federation) の一員として、18 ヶ国 60 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

ウガンダ里子訪問ツアー 参加者募集

期間: 2013 年 8 月 23 日 (金) ~ 30 日 (金)
費用: 298,000 円
定員: 10 名
活動地: ナマスンビ、キョガ、ミソンの 3 地域を訪問し、各地域で開催される「自立記念セレモニー」に参加予定。申込み締め切りは、6 月 28 日 (金)。お問い合わせは、大阪・世界里親会まで。

海外キャンプ参加者募集 !!

今年 7 月末から 8 月にかけて、ルワンダとマレーシアとボリビアにおいてワークキャンプを開催します。開発途上国における極度の貧困による様々な問題を学ぶとともに、活動現場でボランティアワークをします。(ルワンダではワークはありません) **キャンプの様子や開催日程、費用については、4、5 頁のキャンプ特集をご覧ください。** 問合せ、申込みは東京事務所また各事務所まで。

ウガンダ協力団体に車寄贈

アフリカ・ウガンダの当機構パートナー、アガペ・ホスピタルミニストリー (AHM) は、貧困に苦しむ方々のために食糧を支援、また治療を受けたくても受けることのできない方々に首都カンパラ近郊の 4 つの病院への通院の支援などを行っている団体です。現地の要請に応じて当機構から日産エクストレイルをお送りしました。



ハンガーゼロ・サポーター大募集中!

今すぐ▶▶▶ 各種支援の お申し込み ができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

- ☐ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 1,000 円)
- ☐ チャイルド・サポーター (世界里親会) になりたいので説明書 (申込書) を送ってください。
- ☐ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 1,000 円)
- ☐ JIFH (日本国際飢餓対策機構) サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 500 円)
- ☐ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
- ☐ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名: _____ 男・女

〒 _____
フリガナ
住所: _____

_____ (電話) _____

▼申込日: _____ 年 _____ 月 _____ 日▼

FAX・072-920-2155

東日本支援
仙台市で
コンサート

当機構と韓国のビューティフル・マインド財団 (以下 BMC) の共催による「希望のコンサート」が 3 月 1 日に仙台国際センターで開催され、約 220 名が来会されました。2011 年に続き 2 度目となる今回は、演奏家 11 名と BMC が育成サポートしているアカデミーの学生 19 名が出演しました。障害を持ちながら音楽家を志すアカデミーの学生は、アンサンブルやトリオ、デュオ、ソ



ロで、美しくかつ洗練された演奏を披露、人々の心に大きな感動を与えていました。
メンバーは、仙台市内の知的障害者を支援している施設「白い館 まちの工房 まどか」、 「つどいの家 コペル」でもコンサートを開催、施設の利用者や近隣の住民と交流するひとときを持ちました。開催実現のためにご協力をいただいた皆様に心より御礼申し上げます。

ハンガーゼロ・サポーター 2664 円。ぜひあなたのお知り合いにもお知らせください。



日本国際飢餓対策機構

2013 No.273

4

飢餓対策 News



2013 ファシリテーター・トレーニングキャンプで学ぶ参加者

毎年、JIFH は春と夏の休みの期間を用いて「ファシリテーター・トレーニングキャンプ」を行っています。このキャンプの目的は、世界にある飢餓と貧困と闘う人々の自立を現地で支え仕えてゆくワーカーの養成を目的としています。特に「ファシリテーター」という名称が意味するように、人々の心に灯をともし、人々の内にすでにある能力・賜物を見出してそれに気付いていただき、それを用いて共に汗を流し、そしてその人々が今度は他の人々を励まし影響を与えていくという、この働きに仕える人財が生み出されることを願って行われるトレーニングキャンプです。

数年前に訪問したフィリピン、首都マニラの貧困地区で、地域開発の働きを担っている牧師は次の様に語っていました。「貧しさの中にある者は往々にして、自分たちには何も無いのだから仕方がない、何も出来るはずがないとあきらめ富裕層を妬み、誰かの助けを待って座りこんでしまうことがあります。しかし、大切なことは、目に見える物質的なものだけが人を幸せにするのではなく、それぞれの人にすでに与えられている潜在能力を見出し、それを用いることが真の豊さにつながることを伝えること。そして

同時に大人たちには収入につながるプロジェクトを、子どもたちには価値観の土台を形成する教育の機会を教会が提供していくことが大切です。人々が自らの内にある能力を活用して行動し、自分にもできるのだと分かって変革されると、持てる者への依存ではなく互いに助け合う自立した地域変革が始まります」彼はまさに、その人の内にあるものを引き出す真のファシリテーターとしての役割を果たしていました。

心の灯をともし人を世界に遣わす

この牧師の、この言葉が今も心に残っています。「真の貧しさとは、すでに自分に与えられている潜在能力に気づかず、何も用いないことだ」

日本からもこのような、人々の「心に灯をともし」ファシリテーターが全世界に遣わされてゆくことを、切に願います。「あなたがたは世界の光です。～このようにあなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」(マタイ 5 章 14、16 節)

日本国際飢餓対策機構 国内啓発総主事 田村治郎

■発行者 岩橋竜介

■発行所 一般財団法人 日本国際飢餓対策機構

いいね
大募集

Webサイトアドレス <http://www.jifh.org/>
eメールアドレス general@jifh.org
フェイスブック <https://www.facebook.com/hungerzero>

■募金方法 ※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウェブサイトで

身近に
便利に
なりました



●郵便振替 00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替 ●クレジット、デジタルコンビニ

大阪 〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155
東京 〒101-0062 千代田区神田駿河台 2-1 OCC ビル 517 号室
TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782
愛知 〒466-0064 名古屋市中区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F
TEL (052)731-8111 FAX (052)731-8114
広島 〒730-0036 広島市中区袋町 4-8 CLC ブックス 2F
TEL (082)546-9036 FAX (082)546-9037
沖縄 〒901-0156 那覇市田原 3-8-1 コリ香ハウス 201 号
TEL (098)859-4585 FAX (098)859-4540
東北 〒980-0012 仙台市青葉区錦町 1-13-6 エマオ 2 階 E
TEL (022)217-4611 FAX (022)217-6651

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所 (八尾市・生活愛・関西地区のボランティアの皆様が発注作業のご協力を下さっています。

1 分間に 17 人 (うち 12 人が子ども) ・1 日に 2 万 5 千人 ・1 年間では約 1,000 万人が、飢えのために生命を失っています。



東日本大震災から2年が経ちました。被災された皆さまに今一度心よりお見舞い申し上げます。当機構は、被災された人々に対して仙台に設置した活動拠点をベースに物資配布などの緊急支援、避難所への慰問（親善大使派遣）、スタッフ、ボランティアの長期派遣などを進めてきました。そうした活動は、皆さまからのご支援（海外も含む）が大きな力となっています。引き続き当機構が取り組んでいる支援活動をご報告致します。

一人ひとりに寄り添う支援これからも

被災住民の生活再建支援

「置き薬プロジェクト」
協力企業の中京医薬品（仙台市内にも営業所）と共に仙台市と名取市の約600世帯の仮設住宅入居者（一部借り上げ住宅も含む）を対象に、2011年6月から今年7月までの2年にわたり、家庭用常備薬（風邪、頭痛、腹痛、湿布、目薬など）の無償提供を継続中。利用者は必要に応じて何度でも薬の補充を無償で受けることができます。
このプロジェクトは、健康維持のための薬代の負担軽減と高齢者の方々への定期的な訪問（中京医薬品）による健康状態の確認などを目的としています。

復興支援拠点による活動

震災後に生み出された亘理聖書キリスト教会（熊田康之牧師：宮城県亘理郡亘理町：写真下⑥）は、被災地の復興支援拠点として

現在も週1回のペースで、近隣の仮設住宅で焼き鳥などの炊き出しを行っています。また、国内外からのボランティアを受け入れて、励ましのコンサートやイベントなども適時続けています。加えて地元の漁師へ支援として、人的な応援や漁具の支援を進めています。
一方、被災地の人々の復興を支援するセンターとして、石巻市の「お茶っこハウスオアシス」（一般財団法人オアシス）や南三陸町の「愛・信望館」（南三陸町を支えるキリスト者ネットワーク）が生み出され、それぞれ地域の人々の交流促進や子どもたちが安心して集まれる場所の提供に用いられています。

特に南三陸では、地元地権者からの要望に応える形で中澤竜生牧師らが歌津町に新たな大型コミュニティセンター（⑤イラスト）建設を計画、この実現のために当機構と韓国飢餓対策機構が力を合わせて協力しています。

福島の人々への支援

福島第一原発事故によって引き起こされた放射能汚染による心身の健康被害は、2年が経過する今も人々（福島県外避難者も含めて）にとって大きな苦しみとなっています。当機構が人的な面で応援している「ふくしまHOPEプロジェクト」では、外で自由に遊べなくなった子どもをかかえる家族に対して、県外の安心出来る場所で保養できる短期キャンプの実施や保護者同士の交流を通じての情報交換や励ましの場の提供を行っています。



歌津町に建設するコミュニティセンターの完成図、三千坪以上の敷地内に建物と建てられ、住民の交流とともに、若者の職業訓練などにも利用され、地域の再生を支えていく。



「ほぼ毎日行かせていただきました（笑）。特にお米や野菜が嬉しかったね。置き薬も助かっています。頭痛薬とか湿布、風邪薬とか有り難いです。とにかくからだを大切に毎日楽しく暮らすことを心がけています」と話してくださいました。（写真⑥中京医薬品の担当者）



仙台市亘理町の仮設住宅にお住まいの佐藤和子さん（写真⑥）は「熊ちゃん（熊田牧師）の焼き鳥本当に美味しいからね。この2年は長いような気もするけど、私はボランティアの催しなど、とにかく何でも参加します。作りのとかも楽しいし、とにかく前向いて過ごさないとね」と。また熊田牧師は「ぜひこれからも東北を応援してください。そのためには、遠慮せず現地に来てください。地元のために観光もしてください。相談してもらえれば私が案内します。震災を忘れないためにね」と語る。

忘れないで

こころのケアへの支援

当機構親善大使の上原令子さん（ゴスペルシンガー）、森祐理さん（福音歌手）、ソン・ソルナムさん（韓国の著名フルート奏者）による、被災地での慰問コンサートや日本各地の支援イベント等の活動はこれからも継続します。厳しい試練や痛みの中にある人々とつて肉体的な必要（食料や生活物資など）とともに、生きる喜びや希望がもてるように支える心のケアは、もう一つの大きな力となります。



森親善大使による3月の慰問コンサート（宮城県）。慰問はこれまでに70回、これからも続けられます。

この2年間、親善大使だけでなく、韓国のビューティフル・マインド財団やヘオルンヌリ、宝を入れた土の器、アフリカのウガンダの孤児による合唱団をはじめ、様々なアーティストによる被災者支援のためのコンサート活動が行われてきました。当機構は今後も適時、こうした活動を支援者の皆様の協力をいただきながら続けていきます。

これからもご支援ください！

どうぞこれからも被災者支援をお願いします。かつてない大災害の中で、再建に力強く歩み出された方もおられますが、置かれた厳しい状況のため、半歩前進することにさえ大きな負担を覚えておられる方も多くおられます。日本国際飢餓対策機構は、これからも様々な形で、一人ひとりに寄り添うという思いを大切に、特に支援が届いていない方々に愛の手を

仙台市若林区の6農家が共同で農業再開を始めるにあたり2月27日に市民組織の若林ヘルプを通じて、事務所用のコンテナハウスを提供しました。



伸ばし続けていきます。そのために、みなさまからの支援や様々なご協力をお願いいたします。もちろん、世界の飢餓問題、子どもたちへの教育支援も皆様と共に続けていきます。「わたしから始める、世界が、東北が変わる」どうか宜しくお願いします。

東日本大震災募金ご報告
31,474,831円
(2012年3月～2013年2月)
190,573,464円
(2011年3月～2013年2月)
ありがとうございます

東日本大震災被災者緊急募金に引き続きご協力ください。銀行自動引落しやクレジットカードも利用できます。

●被災農家の婦人が語る震災2年●

「あの日は自宅（仙台市若林区井土地区）にいて、下から突き上げられる激しい揺れでした。これは津波が来るなと感じて、携帯ラジオを手に外にでました。私は地区の防火委員で、津波の時はとにかく逃げることを考えました。それで、母と一緒に軽トラックで避難場所の小学校に向かいました」ところが到着した学校では、児童が校庭に整列させられ、避難住民も校舎に入ることが許可されなかった。余震が続いているという判断が優先されたようだが。「でもラジオでは、仙台港に大津波！と呼び続けているのです。だから、先生たちに早く校舎に入れてください、とお願いしたのですが…。その後、海側の方角から白い波しぶきと埃が立ち上がり、そこから大慌てで校舎への避難が始まり、あっという間に校庭に津波が押し寄せて、車も流されていきました。とりあえ

ず体育館に逃げた人たちもいたのですが…」地区の防災に関わってきただけに、その時の無念さが自責の念ともなっている心打ち続ける。「地区には103世帯（津波で40名近くの犠牲）がありました。いま元の場所に戻ったのが3世帯、再建を考えている人が9世帯位で、合わせて



も1割ほどしか戻りません。ですから私たち家族はあそこに戻ることを断念するつもりです」ボランティアが自宅の片付けに来た時に、居間の掘りごたつの中から流されてきたご遺体が出たことも、心の負担となった。さらに追い打ちがあった。「井土地区は危険地区に指定されて、行

政が土地を買い上げるという話で進んでいました。しかしそれが突然白紙になって、資金計画が狂いました。行政の対応は信じられません。現在は親戚が物置として使っていた手狭な借家で家族5人の暮らしが続く。しかし、その生活もストレスのために限界が近づきつつある。そのため負債のし掛かるのを承知で新しい場所での家を再建することを決めた。震災から2年、状況の変化に翻弄されながら、ようやく進むべき道に立つことができた。「私たちは生かされたので感謝しないといけないと思っています。ここで（地域の市民支援組織・若林ヘルプ）集まって、みんなと苦勞を分かち合ったり、少し活動のお手伝いをしながら、私も前を向けるようになってきました。これは8月の七夕祭で飾る折り鶴なんです」心に灯った小さな希望の光。痛みを分かち合う仲間たちと折った鶴は、きっと誰かの心も励ますことだろう。



昨年夏にウガンダとマレーシアで行いました海外ワークキャンプに参加された方々から頂いた感想の抜粋です。海外キャンプは今年も開催します。ぜひ今年の夏は、あなたもワークキャンプ体験してみませんか。
国際協力はまず知ることから!!



ウガンダ

2012夏 海外ワークキャンプで学んだこと

もっと知りたくなりました

田中愛子さん

ウガンダのナマスンビ村に来て、ここにあるもので生活をする中で、貧困の問題をとて身近に感じる事ができました。日本の生活に比べるととても不便なウガンダ。しかし、ここの人たちの朗らかさに触れて日本人にはない豊かなものを持っているのではないだろうかと思われました。



日本から一緒に行ったメンバーにも恵まれ、毎朝開く聖書から教えられたことを分かち合ったり、顔をあわせていろんなことを話す中でたくさんの学びがあり、また笑いがあふれ、本当に楽しい毎日を送ることができて感謝でした。キャンプを通して「貧困についてもっと知りたい」という思いで今回参加しましたが、もっともっと知りたいし、もっともっと自分にできる

ことを見つけて活動していきたいと思いました。

私たちも支援を始めます

柚元直子さん

最初はこの2週間をどうやって過ごしていくのか不安でした。穴が空



いただけのシンプルなトイレだった、インターネットが使えなかったり、村の言葉も全く分からなかったりしたからです。しかし、日本とは違う環境で過ごせたことは私にとって貴重な体験となりました。普段なかなか考えないようなことを考えたり、いろんなことに気づくことができました。最も印象的だったのは村の人たちの笑顔です。みんなすごく輝いていました。その笑顔は私にはないものでした。

日本に帰った今、村の人たちのことを思い出しながら、あのような素敵な笑顔の人になりたいと思っています。また、ウガンダの現状を、身

をもって感じ、帰国後ずっと、私にも何かできないかと考え続けていました。そこで、今回のワークキャンプメンバーと共に里子支援を始めることにしました。ケニアの女の子です。これから支援がスタートするので非常にわくわくしています。

支援が実を結んでいる

三宅康介さん

実際にウガンダへ行くことで自分の常識や価値観がとても限られたものであったことに気づかされました。



ナマスンビ村は「物」は少ないけれど、日本ではなかなか見られない「豊かさ」を人々とのふれあいの中で見つけました。将来エンジニアになりたいと話していたナマスンビ村の友人は、里親の支援によって大学まで進学できました。こうした支援が実を結んでいる様子を見ることができて本当に良かったです。なにより里子たちがスポンサーを親の親のように思ってくれていることがとても印象的でした。

大変な中でみた笑顔の不思議

軽澤似季さん

このボランティア活動に参加しようと思った時、私の中には「現地の子どもたちと遊んだりして仲良くなれたらいいな」ぐらいしかありませんでした。

でも実際に現場へ行って見た時、「自分はここへ何をしに来たのか」という事を考えさせられました。自分に今出来る事を一生懸命しようと思いました。

この村の子たちは私たちが想像するよりももっと大変な生活をしているはずなのにずっと楽しそうに笑っていました。使っている言葉が違うから、上手くコミュニケーションがとれるか心配だったけれど、そんな心配を忘れるほどでした。10日間一緒に過ごしたボランティアのメンバー、普通に日本で過ごしているだけじゃ会う事のなかった人たちと貴重な体験が出来た事は私の中でとても大切なものとなりました。

今回のマレーシアのボランティアで見たこと、

学んだことを少しでも周りの人に伝えていきたい



と思います。

子どもの才能の豊かさに驚嘆

坂口勝彦さん

それぞれ見学した場所でのほぼ共通の感想としては、一見明るく元気に見える子どもたちだが、手足が皮膚病にかかっている子が何人かいたことや、鼻水を垂らした子どもも結構多くて、栄養状態がとても心配になった。

また、不法移民の生活では高学歴なんてありえないことも分かっていたものの、実際に子どもたちと接してみると、折り紙の手裏剣に誰に言われるでもなく絵を描いたり、一度作っただけで作り方を覚えて二つ目を作ったり、折り紙に非常にデザイン的な絵を描く子どもがいたことに驚かされた。しかし、その才能を開花させるチャンスすら与えられない現実に対しても非常にもどかしい思いにさせられた。

学校に行かないのが当たり前？

辻村真衣子さん

今回一番印象に残っているのはヌンパクです。テレビでは見たことの

マレーシア

ある景色ですが、本当にあんなにゴミが捨ててあるとは思いませんでした。初めて行ったとき、あまりのゴミの多さにびっくりしました。

しかし、一番びっくりしたのは学校の時間に学校に行かずに遊んでいる子どもがいっぱいたったことです。学校に行けない子どもたちのために、せっかく

学校がつくられたのに、学校に来ないで遊んでいる子どもが多いのはびっくりしました。私は学校に行くことが当たり前だと思っていたので、学校に行くことが当たり前じゃないと思っている子ども達がいることを見てショックを受けました。また、私はいつも嫌々学校に通っていますが、それがいかに恵まれた環境であるか気づき、自分の学校に対する意識が変わりました。



2013.4
No.273
5

2013年
キャンプ
募集開始
東京事務所

- マレーシア ワークキャンプ
日程：7月31日(木)～8月10日(土) 費用：17万8千円 募集：12名
- ボリビア ワークキャンプ
日程：8月16日(金)～28日(木) 費用：33万8千円 募集：10名
- ルワンダ スタディ・ワークキャンプ
日程：8月19日(月)～31日(土) 費用：33万8千円 募集：10名

飢餓対策
NEWS
4



このほど当機構の特命大使に就任した近藤高史氏（ノア・デジタル代表取締役）が、2月に活動地のカンボジアとバングラデシュを訪問。さっそく2回に分けて報告をしていただきます。1回はカンボジア編です。

～カンボジアの里子を訪ねて～ 突然の悲しい知らせに絶句

日本国際飢餓対策機構 特命大使 近藤高史

それはカンボジア国際飢餓対策機構スタッフからの一通のメールで知らされました。カンボジア北部、タイ国境に近いアンロンベン郊外の村へ、キムホンちゃんという里子の10才の女の子を訪ねた、わずか3日後のことでした。

「オートバイの事故で崖から転落し、先日訪問したキムホンちゃんのお母さんは亡くなりました。お父さんも瀕死の重傷です。お祈り下さい」という短い内容に、私たちは言葉を失いました。「この間、会ったばかりなのに！まだ20代であんなに元気なお母さんだったのに！里子



たち3人の姉妹は、これからどうやって生きていくの…？」いろいろな思いが頭の中をぐるぐると駆け巡りました。

キムホンちゃんは日本のある幼稚園が里親となって支援を続け、これまで文通など交流を持ってきました。私たちが訪問した時も、これまでに届いたたくさんの手紙や絵、折り紙など大切にしまってあったものを、宝物でも見せるかのように机に広げて、一つ一つ説明してくれました。そこには幼稚園の園児や先生たちが書いた「ク

リスマスおめでとう！」とか、「いつも祈ってます！」といった日本語に、必ずクメール語に訳した言葉がついていて、それを読み上げているうれしそうな様子を何枚も写真やビデオに納めながら、これを里親である日本の幼稚園の子たちに見せたら、どんなに喜ぶだろうと思いました。しかしその

お母さんと日本の幼稚園から届いた手紙を見るキムホンちゃん（後方はお父さん）

わずか3日後に、悲しいニュースは飛び込んできたのです。どうやってこの知らせを、幼稚園の子たちに伝えたらよいのでしょうか。私たちはもうアンロンベンの町を離れた後でしたから、戻ることもできず、うつろな心のまま残された家族のために、祈るしかありませんでした。

豊かな親子関係

実際に現地を訪ねて分かったのですが、決して物質的には豊かで

はないかもしれませんが、たくさん家族や親族といつも一緒に生活している里子たちの様子は、むしろ、日本の親子関係以上に、豊かで楽しそうにすら思えました。

きっと村のみんなが彼女を支えてくれるでしょう。でも今は事故によってお母さんを失い、

どれほどの悲しみを幼い心で味わっていることでしょうか。

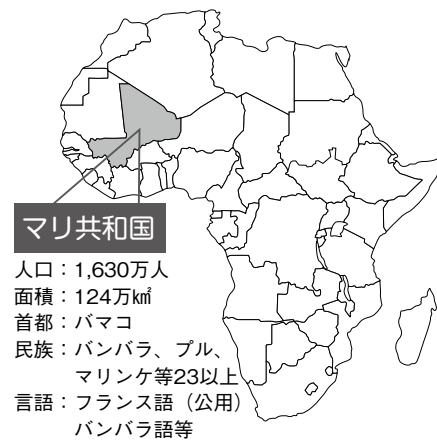
「神様、どうしてこのようなことがあるのですか。キムホンちゃんを守って下さい。私は何をしたらよいのでしょうか」私なりに祈る中で示さ

れたのは、これはカンボジアだけじゃない、世界の里子たちを取り巻く現実だよ。少しずつ生活が便利になっていく中で、このような事が子どもたちの周りでいつ起きるかわからない。だからこそ祈りをもって支援を続けていくこと、またこうした子どもたちの様子を伝えてゆくことが大切なんだということでした。

キムホンちゃんたち姉妹を残し亡くなったお母さんの気持ちを思い、私も里親の一人にならせて頂く決心をしました。



戦地から逃れてきたマリ国内避難民に緊急支援



西アフリカのマリ共和国では、長引く深刻な貧困と食糧不足のために政情が大変悪化しています。昨年から反体制派勢力の活動が活発になっていましたが、2013年1月にフランス軍が介入したのをきっかけに、北部で勢力を拡大していた過激派グループ、アルカイダとの戦闘が激化し、戦闘の前線となった北部から20万人以上の



避難民に配給する食事を準備している様子

難民がマリ南部と周辺国に避難しました。

戦闘から逃れてきた家族は、文字通り着の身着のままで避難しており、避難先での住居はもとより、食糧も飲料水もなく、特に子どもたちは栄養不足で深刻な危機にさらされています。

この状況に対し、日本国際飢餓対策機構はマリ南部のディアバ

リ近郊で支援活動を続けているパートナー、WorldRenewを通じて、2200人分の緊急食糧、飲料水、水の容器、鍋、毛布、衛生キット、薬などの支援を行ないました。

皆様からのハンガーゼロのご支援を感謝します。当機構は、これからもサポーターと力を合わせてハンガーゼロに取り組みます。



当機構は2012年2月から本格的にFacebookページ（ハンガーゼロ「日本国際飢餓対策機構」）を通して、世界の飢餓の現状やニュース、現地の情報を発信しています。

その中で、今年2月に東北からのお願いとして、亘理聖書キリスト教会・熊田牧師からの要請を掲載させていただきました。それは4月から始まる小学校の大掃除をする際に大量の雑巾がいるので送ってほしいという依頼でした。さっそくその旨をFacebookペー



届いた雑巾の一部の清掃作業の様子

ジ内で掲載したところ、多くの方が「いいね」や「コメント」で反応してくださり、それぞれが友人にFacebookを通して、この情報を広めてくださいました。

3月初旬、JIFHスタッフが亘理聖書キリスト教会を訪問した際、熊田牧師は全国から届いた大量の雑巾にたいへん喜んでおられ、中にはメッセージ付きの雑巾もあったととても感激されていま

した。Facebookやツイッターを通して、このようにこれまでになかった速さで情報を提供することで、現地と支援してくださる皆様とつながることができます。今後も、東北被災地の情報だけでなく、世界の飢餓、貧困の現状を発信していきます。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。